

1970年代初期の集団自力建設のデザインと組織

—状況劇場山中湖稽古場の建設過程の整理を通して—

2022/11/10
中谷研究室
セルフビルドゼミ
1X19A057-0 吳雄仁

レジュメの構成

- ・レジュメの構成
- ・目次構成
- ・論文内容（序論・本論・結論）
- ・参考文献/出典

目次構成

【序論】

- 0-1. はじめに（主題と対象）
- 0-2. 基本情報
 - 0-2-1. 状況劇場山中湖稽古場の基本情報
 - 0-2-2. 人物関係
- 0-3. 既往研究と獲得資料
 - 0-3-1. 既往研究
 - 0-3-2. 獲得資料
- 0-4. 本研究の位置づけと研究目的
- 0-5. 研究方法
- 0-6. 本論文の基礎情報

【本論】

- 第1章 乞食城自力建設にみられる自力建設の精神
 - 1-1. はじめに
 - 1-2. 状況劇場をまきこんだ 1960年代の社会背景と思想
 - 1-3. 都市から離れることの意味
 - 1-4. 自力建設における集団施工
 - 1-5. 小結
- 第2章 乞食城にみられる自力建設のデザイン
 - 2-1. はじめに
 - 2-2. 厳しい環境への適応
 - 2-3. 設計思想
 - 2-4. 小結
- 第3章 乞食城自力建設にみられる自力建設の現場
 - 3-1. はじめに
 - 3-2. 技術協力者の存在
 - 3-3. 材料の調達
 - 3-4. 建設活動の実態
 - 3-5. 小結
- 第4章 設計工房・AURA 設計工房の「塔」の建築3作の比較分析とその考察からみる自力建設のロマンチズム
 - 4-1. はじめに
 - 4-2. 「塔」の建築の概要
 - 4-2-1. 山口邸計画案
 - 4-2-2. 河原邸
 - 4-3. 乞食城の図面
 - 4-4. 比較分析
 - 4-5. 分析結果からみる自力建設のロマンチズム
 - 4-6. 小結
- 第5章 考察：自力建設とその組織
 - 5-1. はじめに
 - 5-2. 考察：高山建築学校との比較
 - 5-2-1. 高山建築学校の概要

5-2-2. 建設の主体からみる
5-3. 考察：現状との比較

【結論】
結-1. 結論
結-2. 本研究の今後の展開

論文内容

【序論】

0-1. はじめに

1960年代に日本において学生運動が激化していく中で現れた紅テントで知られる小劇団「状況劇場」。彼らは、1970年から1971年の間、山中湖に彼らの稽古場（状況劇場山中湖稽古場¹、通称：**乞食城**、以下乞食城と呼称）を**自力建設した**とされている。

当建築の自力建設は、建築と演劇という**通常交わりのない人々**が集団として出会っていることに特質がある。それとともにこの建設における限界性と可能性について考えることで自力建設の可能性を再検討し、自力建設がどのようなものかを再検討することも必要なのではないか。

¹山谷明氏によるドキュメントをはじめ、『怨恨のユートピア』刊行委員会「怨恨のユートピア 宮内康の居る場所」（れんが書房、2000）での呼称

0-2. 基本情報

0-2-1. 状況劇場山中湖稽古場の基本情報

竣工年：1971
 建築主：大鶴義英（唐十郎）
 立地：山中湖村霜窪（現存）
 敷地面積：364.14㎡
 延べ床面積：234.10㎡
 用途：稽古場、倉庫
 （台帳上は、唐十郎の個人住宅）
 構造：木造・コンクリート造
 階数：地上2階

0-2-1. 人物関係

施主：唐十郎+状況劇場
 設計者：宮内康の友人と彼の所員、理科大の生徒
 支援者：阿部建築（社長：阿部昭彦、施工）
 増田一真（構造）屋根職人
 （詳しくは、図3参照）



図1 乞食城（北側）



図2 配置図

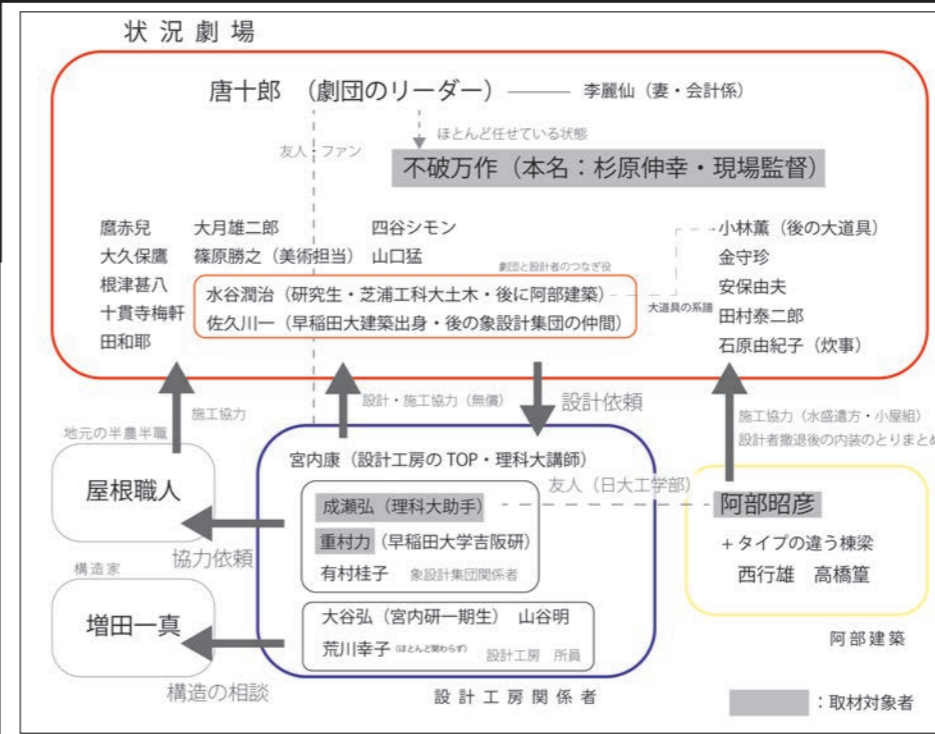


図3 自力建設にかかわった人々（敬称略）

0-3-1. 既往研究

a) 『怨恨のユートピア』刊行委員会「怨恨のユートピア 宮内康の居る場所」（2000）
 →乞食城建設の設計者側の関係者の一人である宮内康の死後にまとめられた宮内康の小論などをまとめたもの。【ドキュメント】"状況劇場" (P159～170) で山谷明（設計者側の人物）がまとめた建設過程がある。そこに歴史的視点はかけている。

b) 山口猛「紅テント青春録」(1982, 立風書房)
 →状況劇場に所属していた山口猛による手記。状況劇場に乞食城建設活動の直前に参加した山口が、乞食城の建設活動にも触れながら、当時の状況劇場・唐十郎としての活動、思想を多く語っている。
 →a)b)は、異なった立場の建設関係者によるレポートである。その内容を要素に分解して、整理しなおす。説明が不十分でないところもあり、さらにいえば、この出来事は、建築史の中でポストモダンの一つの系統として考えられているセルフビルドの例には、挙げられていない。²その意味でも**自力建設としてこの建築を考え直すこと**が本研究の位置づけとなる。両者の文章は、事実関係を知るうえで参照とすべきである。

²宮内康らの同時代建築研究会「現代建築 ポストモダニズムを超えて」(1993)でさえも取り上げていない。

0-4. 本研究の位置付けと研究目的

本研究の目的は以下の2点が挙げられる。

①この自力建設を全体的な建築史などと比較することで時代的にこの建設活動がどのような意味合いがあったかを位置づける。

②この建設活動の批評を通して、1970年代の自力建設の可能性と限界性を問う。

0-5. 研究方法

第1章～第3章 ヒアリング等で獲得した情報をもとに、乞食城自力建設という具体的な出来事から設計・施工以前の要素（第1章）

設計上の要素（第2章）、施工上の要素（第3章）を整理し、自力建設の要素を明らかにする。

第4章 図面資料をもとに自力建設のかたちに着目し、同じ設計者の似たコンセプトをもつ建築と比較することで唯一の自力建設である乞食城から自力建設の特性を明らかにする。

第5章 第1章から第4章までの内容をその他の1970年代近辺の自力建設による建築などと比較することで批判し、その可能性を問う。

【本論】

第1章 乞食城自力建設にみられる自力建設の精神

1-2. 状況劇場をまきこんだ

1960年代という安保から戦後民主主義批判を行った新左翼は全共闘に盛り上がりを見せたものの、1968年の華青闘告発をターニングポイントに問題が露呈し、共闘していたグループは分かれ、それぞれの形で迷走していく。自力建設という行為もその影響を受けている。乞食城の主体である状況劇場は、そういった学生運動の中から自立し、紅テントを使い、**反社会性を示していくのであった。**

1-3. 都市から離れることの意味

乞食城自力建設に見られるように自力建設を試みる人々は、都市を離れ、郊外など誰の者にもなっていない場で、**自分たちの場を作り、都市に対峙していた。**

1-4. 自力建設における集団施工

集団による自力建設は、金銭面のメリットだけでなく、「俳優修業」の一環として考えられていた。しかし、実態としては、自力建設に際して団員募集をし、単に労働力としてみていた面もあるかもしれない。しかし、集団での自力建設においては状況劇場のような**「やくざ的一家組織」**で、**唐の下、全員が結束している**」（山口猛「紅テント青春録」（立風書房、1982）, P27 1.2）の性質が自力建設を実現するものだった。

第2章 乞食城自力建設における自力建設のデザイン

2-2. 厳しい環境への適応

乞食城は、図2にみられるように沢に向かった急斜面に位置していた。また、そこに火山灰の地質、冬場の雪など気候面も厳しかった。これに適応するための図4のような断面計画、図5のような屋根のかしめ方が試みられた。

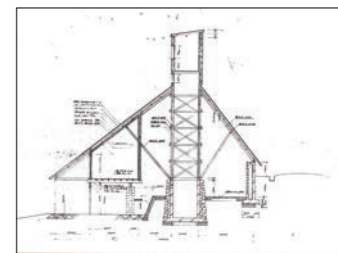


図4 南北断面図

このように自力建設において、自分たちの場を作る試みは、立地条件を厳しくしたものの、設計者のデザインや自力建設者の労働で対抗していった。

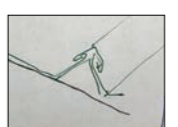


図5 屋根のかしめ方

2-3. 設計思想

乞食城にみられるように自力建設では、設計者独自のデザインもあるものの、素人による施工という性質上必然的ともいえるような誰でも建てられる**素朴で根元的なかたち**を目指していた。



図6 乞食城の内観模型

乞食城の設計者は、「丈夫で雨漏りはしないがつぎはぎだらけでも**好いバラックのような大空間**」(本論文資料編メール:成瀬弘, 2022/9/28)を目指していた。これは、自力建設という初源的な行為で実現できるものだと考えたに違いない。また、富士山が近くにあることにも留意していた。その噴火によって、**遺跡**のようになることも考慮していた。¹それは、建築の半分以上を失っても、人々に愛され、**場として残す試み**であり、その中には、再度使用者によって再構築するというのもできるのかもしれない。



図7 「塔」の施工の様子

¹本論文資料編 ヒアリング:成瀬弘参照

もう一つ重要なのは、「塔のイメージ」である。それは、設計者のひとりである宮内康の提案であった。彼にとっては、それこそが原初的な様式(後に「**髯様式**」と呼んでいる。)であって、この計画以前の山口邸計画案やそれ以降の菅沼邸、河原邸などにもそれがみられた。第4章で分析を含めて詳しく言及する。

乞食城にみられるように自力建設では、誰でも建てられるようなデザインを必要とする。そのために原初的なイメージにも影響を受けやすかった。

第3章 乞食城自力建設に見られる自力建設の現場

3-2. 技術協力者の存在

自力建設は、技術を持たない人々によって実現される。そのために、技術獲得の手段として、乞食城における阿部昭彦や水谷潤治のような技術を指導する人物は不可欠だった。とくに乞食城の自力建設では指導だけでなく、実際の施工をおこなうこともあった。それは、自力建設は**手段にすぎず**、第一義は純粋に建築の完成に注力しているということである。

3-3. 材料の調達

自力建設において、建築が本業でない素人集団は材料の入手でも苦勞し、材料自体も厳密な発注が必要だった。建築がどのような材料の組み合わせでできるかを考えるだけではなく、敷地周辺の流通環境を理解する、あるいは、理解している人物と関係を気づくことが、建設活動をよりよくできると考えられる。

3-4. 建設活動の実態

自力建設は自分たちのために自分たちでつくるという特性上、**生計をたてるための手段**を必要とし、毎日建設に従事することは難しく、その結果、工期が通常よりも長くなった。しかし、長くその土地にいること地元住民との関係性を構築していくような通常の建設活動では、得られないものもあった。

第4章 乞食城自力建設に見られる自力建設の現場

4-2. 「塔」の建築の概要

4-2-1. 山口邸計画案

立地:なし
延べ床面積:188.9㎡(推定)
用途:住宅
構造:鉄筋コンクリート造
階数:地上3階

概要:宮内康が東大闘争の直後(1969年)に石井和紘と山口が組んで体に不自由のあった山口の父の家を設計したものである。塔の部分は、山口の父のためのエレベーターがあり、その機械室を内包している。

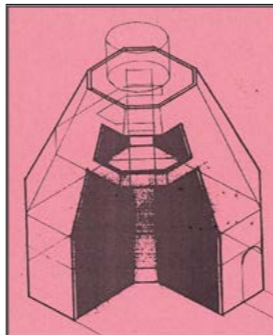


図8 山口邸計画案

4-2-2. 河原邸

立地:東京都世田谷区等々力
延べ床面積:135.0㎡
用途:住宅
構造:鉄筋コンクリート造
階数:地上3階

竣工年:1973年
概要:作家の河原淳氏と彼の家族のための住宅。「高い所に住みたい」という彼の要求が設計の発端。塔の最上部、乞食城でいう天守閣の部分で、施主の書斎となっており、その下部は階段。






図9 河原邸

4-4. 比較分析

ここでは、「塔」が建築内でどのような意味合いをもっていたかを分析した。塔が建築に対してどのくらいの割合を占めているかを「塔の占有率」と呼び、定義した。また、図面を見比べると、内部空間での塔の認識の面で3つの建築が異なると感じた。そこで単純に塔がある上部への見上げが一階からどのくらい確保されているかを「塔への視認率」と呼び、定義し、分析した。その結果が表1である。

表1 3つの塔の建築の「塔への占有率」と「塔の視認率」

	山口邸計画案	乞食城	河原邸
塔の占有率	5.12	3.31	21.7
塔への視認率	37.9 (3F) 25.4 (2F) →25.4	80.6	58.9
塔と1階平面図			

乞食城の塔は、建築に対して、小さい面積を占めながらも、できるだけ多くの場所から見える象徴的なものであった。

4-5. 分析結果からみる自力建設のロマンチズム

乞食城とその他ふたつの建築の違いとして、住宅と別荘兼稽古場の違いや建築の規模の違いがあり、それによる要求にこたえる形で

制約もあったと考えられる。それ以外にも時代背景からくる塔のあこがれが乞食城の自力建設に適していたとも考えられる。筆者の指導教員である中谷礼仁によれば、乞食城には、**三里塚の塔**の影響も考えられるのではないかという指摘があった。当時、有名な芝山町岩山の大鉄塔はなかったが、農民放送塔などはあった。



図10 農民放送塔

このような塔は、農民や新左翼らの素人による自力建設で建てられ、闘争への多大な影響を与えており、それを見ていた建築家にとってはショックだったに違いない。塔の考案者である宮内もももとは東大の全学連の委員長だった人物であり、新左翼側の人間だったはずだ。よって、三里塚の塔への**形態としてのロマンチズム**の意味合いもあったのではないかと考察できる。それを三里塚と同様の自力建設という一種の**ロマンチズム的的行為**により実現しようと考えたのが乞食城だったのではないか。

塔は、建築における象徴であって、三里塚では、いまにもくずれそうにみえたものを乞食城では支え、自力建設という手段で実現するために底面積に対して、最小限に塔を作り、それを四方向から支えていたのではないかと。そして、できるだけ塔が象徴として内部からもみえるような断面構成を試みた。これらは、三里塚と同じ自力建設という行為だったからこそ生まれたことともいえよう。それも含めて、**ロマンチズムがこの建築には埋め込まれている**と考察した。



図11 施工時の乞食城の「塔」の様子

第5章 考察:自力建設とその組織

5-2. 考察:高山建築学校との比較

5-2-1. 高山建築学校の概要

高山建築学校とは1972年から倉田康男を校主として、石山修武、鈴木博之らの講師陣とともに「近代批判」を出発点に主に夏季に開かれた建築学校である。そこで石山修武や鈴木博之がやろうとしていたことに着目していく。講師のひとりであったモリス主義者であった小野二郎が「**ここをモリス工房みたいな活動の場にしたい**」(趙海光「高山建築学校:「私」を起点にすること」「建築雑誌」2013年6月号(日本建築学会, 2013) P36.1.67-68)と言ったことに共鳴し、その再現を目指した。

5-2-2. 建設の主体からみる自力建設のとらえ方
高山建築学校と比較すると、乞食城の自力建設はロマンチズムに過ぎず、社会との関係性を持つ段階にはいかなかった。それは、演劇という手段をすでにもっていたために**建築の完成が彼らにとってのゴールだったからだと考えられる**。

高山建築学校と乞食城は、集団であるという特性で似ている。石山は、自力建設wが行きつくところは、狂気でそれが集団になると、「**赤軍派みたいになっちゃう**」(趙海光+高山建築学校編集室=

編「高山建築学校伝説」(鹿島出版会, 2004) P32.1.13)と表現しており、高山はそうはならなかった。乞食城もそうならずに済んだのは、1-4で述べたように集団のまとめるにあたって、**「唐十郎」というルールが存在したから**だと考えられる。反社会性を持っているはずの劇団が前近代的な組織のままであるという矛盾に設計者側の撤退の理由もあったに違いない。

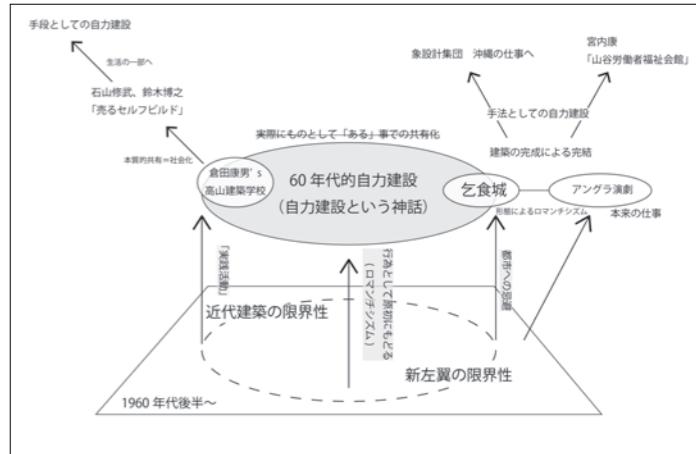


図12 60年代の自力建設とその後

5-3. 考察:現状との比較

乞食城は、竣工から50年以上たった今もいくつかの内部の増築がされ、維持されている現役の建築である。それは、用途にこたえる増築などをできる初源的で施工が比較的簡易な構成を自力建設の特性上もっていたからである。それは、自力建設が**もつ使用価値を自在に変更できる**ということではないか。

【結論】

劇団と建築設計者の協働という特質を持った乞食城の自力建設から1960年代と連続した自力建設という名の「実践」とその前近代性を必要とした組織形態を確認できた。そして、そこに自力建設の可能性と限界性があった。

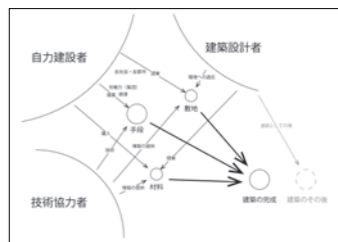


図13 乞食城自力建設からみる1960年代的セルフビルドの作られ方

参考文献 / 出典

【参考文献】
[1]『怒根のユートピア』刊行委員会「怒根のユートピア 宮内康の居る場所」(れんが書房, 2000)
[2]宮内康「建築にとって〈参加〉とは何か」『D & 1003号』(トレード・タイムズ社, 1971)
[3]AURA 設計工房「物見櫓の家」,『建築文化』1973年9月号(彰国社, 1973)
[4]宮内康ほか「インフォーマルな集団関係はどう建築されるか」『建築文化』1971年10月号「建築と集団」(彰国社, 1971)
[5]山谷明「康さんの不思議な学校」『住宅建築』1992年12月号(建築思潮研究所, 1992)
鈴木博之「建築の世紀末」(高文社, 1977)
ウィリアム・モリス(山崎康雄訳)「ユートピアだより」(岩波書店, 2013)
石山修武「ラック浄土」(相模書房, 1981)
同時代建築研究会「現代建築 ポストモダニズムを超えて」(新曜社, 1993)
石山修武「建築家にとって自宅とはなにか」,『建築』1972年1月号(青瀬社, 1966)
趙海光+高山建築学校編集室編「高山建築学校伝説」(鹿島出版会, 2004)
趙海光「高山建築学校:「私」を起点にすること」『建築雑誌』2013年6月号(日本建築学会, 2013)
高山建築学校事務局「高山建築学校パンフレット VOL.1」(EDITION DE PINK HOUSE)
石山修武+鈴木博之「牧歌と熾烈・高山建築学校」『at』1996年2月号(1996)
【出典】
図1 筆者撮影(撮影日:2022/8/10) 図2 Google Earthをもとに筆者作成
図3 筆者作成(11)2や関係者の情報より) 図4.8.11 成瀬弘氏より提供 図5 重村力氏作成
図6 [1]P3より出典 図7 [1]P166より出典 図9 [3]P102より引用
図10 三里塚築山空港反対同盟「三里塚闘争小史」(https://www.sanrizuka-doumei.jp/blog/2007/07/post_242.html) (最終閲覧日:2022/11/7)より出典
図12, 13 筆者作成